慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	再び真福寺泥炭層出土の土器について(下)
Sub Title	On the potteries from Shinpukuji peat-bed, Saitama (II)
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.127- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

再び真福寺泥炭層出土の土器について（下）

鈴木公雄

目次

一　緒言
二　拓本資料の紹介と分類（以上前号収録）
三　安行式の細分と泥炭層出土土器（以下本号収録）
四　結語

三　安行式の細分と泥炭層出土土器

安行式の細分は山内清男により大正末年より昭和の初年にかけて行われたが、それは大略以下のような状況で進行したものと考えられる。

山内は大正八年（一九一九）の埼玉県安行村領家猿貝貝塚発掘資料にもとづいて、大正十三年（一九二四）に細別型式として命名するが（山内　一九三九～四一）、はじめは関東の後期からの伝統を引くものと評価していたのだが（山内　一九三二）真福寺貝塚の再吟味において山内は安行式を安行1～安行3に細分し、「安行3が示すが如く、相当にその伝統から脱化して居ることを、指摘せねばならぬであろう」として先の考え方を撤回する方向を示した（山内　一九三四）。

山内をしてこのように云わしめた原因となったのは、山内自身がしばしば述べているように、大正十五年に大山史前学研究所が行った真福寺貝塚及同泥炭層の調査だった（山内　一九三二、同　一九三四）。大山史前学研究所の甲野勇と竹

下次作は貝塚出土土器と泥炭層出土土器に明確な差異のあることを知り、後者を真福寺泥炭式と仮称した。このような状況に対応して、山内は大町四郎等の発掘になる下総岩井貝塚の出土土器を追加しこれを安行1とした。そして真福寺貝塚出土土器を安行2、同泥炭層出土土器を安行3として安行式土器を三つに細分し、さらに安行2と3のあいだに他の一型式（2―3中間の式）の存在する疑いが強いとした（山内　一九三四）。

この2―3中間の式がいかなるものであるかは、昭和一四年から一六年にかけて発刊された日本先史土器図譜の中でとりあげられることとなった。この第Ⅶ輯　安行式土器（前半）の解説において山内は、従来の安行式細分の経過を説明したあと、この2―3の中間型式は一つではなく二つあること、そこでこの2―3の中間型式を安行3のうちに合併し、そのなかに3a、3b、3cの三区分を立てることにしたいという考えを示した。そして先史土器図譜第Ⅹ輯　安行式土器（後半）において、「安行式後半即ち安行3式は晩期縄文式に属し同時代に東北地方にあった亀ケ岡式土器と交渉を持ち、そして亀ケ岡式土器又はその影響を受けた土器を多数伴存するのが常である」と定義した。そして安行3式を3a、3b、3cと区分し、それぞれの説明を行ったのだが、安行3a式はともかく、3b式と3c式については同一の土器に対して「恐らく3b式（惑は3c式かも知れぬ）。」とか、「恐らく安行3b式（a式かも知れぬ）」といった説明を行ったため後の人々の間で安行3式の細分理解について一種の混乱を生じる遠因を作ることとなった。この安行3式の細分過程において、安行3c式については先の真福寺泥炭層出土土器に加えて、山内自らが採集した東京都小豆沢貝塚出土の一括資料、群馬県板倉沼出土資料などがその具体的な内容として考えられていることがわかるのだが、安行3b式については「疑わしい存在であったが昨年春漸く確定的となった。しかし型式内容等に不明な部分が多い。」として明確な説明を行っていない。そしてこのことが今日に至るまで、安行3b式の内容が不明確となっていることと関連している。さらにまたこの点は、安行2―3の中間の式がなぜ一つではなく二つあると考えたのかの説明とも結びつく重要な点であるにもかかわらず、十分な説明がなされていない。こうした点から山内の安行3式の細分は、東北地方の亀ケ岡式の細分にあわせて机の上で作られた型式ではなか

ったのかといわれる点にもなっているのである（早川智明　一九六五）。

以上のような経過からわかるとうり、安行3式の細分には今日もいまだ未解決の点がある。安行3c式についてのみみると真福寺泥炭式とかつて呼ばれた泥炭層出土土器が中心をなすものと考えられていることがわかるのだが、その内容が具体的に示されるようになるのは二十年以上経過した戦後のことであった。

昭和三十八年以降多くの人々によって関東地方晩期縄文土器の編年についての再検討が行われるようになった（西村一九六一、杉原・戸沢　一九六三、鈴木　一九六三）。その過程で多くのことが問題となったが、安行3c式に限ってとりあげるとすれば、杉田・桂台遺跡における前浦式土器との伴出関係と、それから引きおこされた安行3c式の細分についてが問題となった。このうち、安行3c式の細分については、埼玉県奈良瀬戸遺跡の調査が行われた結果、大洞C_2式土器が安行3c式とともに出土し、これと文様等の変化から、従来の安行3c式を$3c_1$式と$3c_2$式に区分しようという提起がなされた（国学院大学考古学会　一九六三）。このような動きに対して、坂詰秀一は埼玉県石神貝塚B地点より出土した縄文のない一群の土器を紹介し、この一群の土器は杉田A類といわれる安行3c式とは異ること、また埼玉県真福寺貝塚出土の資料とも異っているが、さりとて安行3b式とも云えない。おそらく安行3c式に近似するより古い様相を持つものであろうとした（坂詰一九六三）。このような動きに対して山内は「安行3c式には大洞C_1式が伴うことになっていたが、大洞C_2式を伴う式は別に安行3d式とするのがよかろう」として安行3c式の細分に積極的な姿勢をみせた（山内清男　一九六四）。また筆者等が真福寺泥炭層を調査し、そこから出土した土器が坂詰秀一によって報告された石神例と酷似していることを示し、安行3c式の細分の方向を肯定したのもこのころであった。

先に奈良瀬戸遺跡出土土器の検討から安行3c式の細分を提起した一人である川崎義雄は東京都下布田遺跡の出土土器をとりあげるなかで、安行3c式は大きく列点文系と入組文系に二分され、両者は別々に主体をなして発見される例の多いことを指摘した。そして列点文系土器を出土する代表的遺跡として目黒東山遺跡（麻生・川崎　一九六四）、石神貝塚B地

点（坂詰　一九六三）、入組文を主体とする代表的遺跡として下布田遺跡（川崎　一九六六）、下原遺跡（神奈川県　一九七九）、杉田遺跡（杉原・戸沢　一九六三）などをあげた。ただし土器のこまかな特徴、内容については後日再めて詳しく論じるとして一応の概略をのべたに止った。川崎はこれに続いて東京都下沼部貝塚出土の晩期土器の紹介を行ったが、安行3c式の細分に関しては先に示した見解をくり返したのみで新らしい所論の展開はみられないまま終っている（吉田・川崎　一九六九）。

以上のような安行3c式の細分とは別個に安行3c式そのものが大洞C_2式に併行するものであるとする考えを提示していたのが早川智明である。早川は山内による安行式土器の細分過程を検討し、それらのうちの特に晩期の土器型式が「客観的事実、層位関係等に立脚して設定された型式とはいい難く、机上の創作によって生れた仮空の型式であるという疑いが濃厚にみられる」として、犢橋貝塚M地点出土土器などの新資料に基く晩期編年の改訂を行った（早川智明　一九六五）。早川智明は、筆者の云う姥山Ⅱ式、同Ⅲ式を含む一群の土器の存在を千葉県園生長者山貝塚、同犢橋貝塚、大宮市膝子遺跡等の出土資料のなかに指摘した。そしてこれらの土器を犢橋式と命名し、関東地方における晩期第二段階の土器型式と考え、東北地方の編年との関係については、犢橋貝塚、膝子遺跡においてこれらの土器に大洞C_1式土器が伴出することから、犢橋式は大洞C_1式併行の型式として考えられるとした。そしてこの結果、安行3c式（早川論文中の真福寺Ⅱ式、具体的には杉田A類的内容を持つもの）は大洞C_2併行型式と考えられることになった。

この早川の見解のうち、前半の部分、つまり犢橋式が大洞C_1式に平行する関東地方晩期における第二段階の型式であるとする点は、姥山Ⅱ式とⅢ式の分離を除けば筆者等の成果とも合致し支持しうるものである（鈴木　一九六三他）。これに対して、後半の安行3c式の問題については若干の問題を指摘できる。それは、この型式を早川が真福寺Ⅱ式と呼んだことに一つの原因がある。早川はこの型式について「なお、安行Ⅲc式と同Ⅲb式の一部をあわせた一型式には、真福寺泥炭層遺跡が最初の例として、――問題は残るがとりあえず――真福寺Ⅱ式と称しておきたい。（但し、厳密には杉田遺跡A類

土器的内容をもつ資料をいう。真福寺泥炭層遺跡出土資料はこれと趣を異にする点が多いし「真福寺貝塚の再吟味」で示されているものだけでは不充分であるから)。」(早川智明　一九六五)。と説明している。しかし引用文中にも早川自身問題にしているとうり、真福寺泥炭層出土土器の中には杉田A類に類する資料はきわめて少く、かつ両者はすでに述べてきたように文様その他において基本的に異っているのだから、杉田A類的な安行3c式を大洞C_2併行型式とするのは良いとしても、それに真福寺Ⅱ式という型式名を付するのは型式内容の理解を混乱させることになる。むしろそのまま杉田式とでも呼ぶ方がその内容を端的に示し得たのではなかったろうか。以上のような点はあるが、安行3c式土器が大洞C_2式に併行する可能性を関東地方晩期縄文土器の編年体系の再検討の中から独自に提示した早川の考え方は高く評価すべきものである。

このように安行式3cを中心としてさまざまな新資料の紹介が行われ、またその編年的位置、大洞式土器との併行関係、あるいは細分の可能性等々についての検討が進められていくなかで、久しい沈黙を破って山内清男が安行3c式の内容について資料を提示し、見解を述べるという事態をむかえた。山内は昭和四二年以来、遂次自己の旧稿を忠実に復刻する作業を開始していたが、その第三冊目に相当する部分の余白録に戦前自らが採集した東京都小豆沢遺跡の安行3c式土器の一部を図版と共に紹介した。この資料について山内は「戦前この地の宅地造成の際、一地点から密集して土器片を得た。正に安行3c式であり、このうちに大洞C_1式一片がある」と説明した(山内　一九六七)。この「正に安行3c式である」として紹介された土器は、沈線による帯状入組文と列点を有する広口壺(山内付図11)、レンズ状沈線文と列点を有する台付(同3)、及び深鉢(同2)などを主体とするもので、その内容は石神貝塚B地点、真福寺泥炭層出土土器などときわめてよく類似するものであった。

この小豆沢例の紹介により、山内が考えていた安行3c式の内容がきわめて明確なものとなった。少くともこの図示された資料から考える限り、山内の云う安行3c式には、杉田A類の主体をなす土器は含まれず、筆者等の真福寺泥炭式そのも

のといえる。特に実測図で示された広口壺の存在はこの点をよく示すものと考えられよう。従って筆者は安行3c式の内容に関しては、この小豆沢例の公表によって確定をみたものと考えている。そして問題はむしろそれより新らしい、山内の表現を仮りれば大洞C_2式を伴うより新らしい安行3c式＝3d式の内容を明確にする点にあると考えている。この点に関してはすでに述べたように、東京都下布田、及び下沼部遺跡の資料に基く川崎義雄の3c式細分が示されているが、そこでは大きく安行3c式土器を列点文系土器と入組文系土器の二者に分け、後者を3d式とみなすという見解が示されているもの、それぞれの細分型式の内容についての詳論は十分には行われていない。以下この点について、筆者の見解を示しておきたい。

従来の安行3c式を二分して安行3c式と安行3d式に区分する場合に一般的に云われていることは列点文を主体とする土器が古く、三叉入組文を主体とするものが新らしいとする考え方である。これは大筋において誤りないものと考えられる。しかし、新らしい3c式の代表ともいわれる杉田A類土器の中にも列点文を有する土器は少なからぬ量で存在するのであって、単に列点文の多少だけでこの問題を考えてはいけない。杉田A類の中にみられる列点文のある土器をみると、列点の多くは文様帯を水平に区画する2本の平行沈線文の中に複列で施文されているものが多い（杉原・戸沢　一九六三　第5図3・14・16・17・19・35）。そしてこれらの土器の主文様は横流れのつよい三叉入組文となるが、注目すべきことは、これらの三叉入組文の中には全く列点文を伴わないのである。もちろん杉田A類中には主文様帯の文様の中にも列点文を持つ土器（たとえば同前第5図4・13・23など）も存在するがこれらはいずれも真福寺泥炭式の中に含ませることのできるものであり、換言すればより古い様相といえる。

このような点に注目してみると、従来一般に安行3c式土器として一括されていた土器の中に、二つの類型を区別することができる。まず新らしい様相を持つものとしては、

1、列点文は胴部にめぐる文様区画帯としての平行沈線文の中に施される場合が多い。

2、主文様帯の中は三叉入組文を主体とする沈線文が発達し、その中には列点文を伴わない。

という特徴を指摘しうる。これに対し、古い様相を持つものとしては以下のような点を指摘できる。

1、列点文が多用され、それはレンズ状沈線文、2本の沈線による帯状入組文、平行沈線による弧状沈線文などと複合してさかんに用いられ、けして文様区画帯としての平行沈線文の中だけで用いられるのではない。

2、文様は2本の沈線による帯状入組文、レンズ状沈線文、平行弧線文といったもので、三叉文・三叉入組文も存在するが文様の主体とはなっていない。

このような二者はそれぞれいくつかの器形のセットから構成されている。筆者は前者のような特徴を持つものを安行3d式、後者のような特徴を持つものを安行3c式と考えたい。

以上のような筆者の3c式、3d式の理解ときわめて近い結果を示したものに、田部井功の分析がある。田部井は埼玉県後谷遺跡出土の安行3c式を周辺地域の資料と比較しながら、主として文様系統論の立場から分析を加えた。出土土器の器形を考慮に入れてA～Eの五類に文様を分ち、それぞれの類の中での文様系統を追跡してI～III期に区分しうることを示した。このうちI期は姥山II・III式に相当するものであるが、II期は安行3c式、III期は安行3d式に相当するものとした（後谷遺跡発掘調査会　一九七九）。ここで示された安行3c式と3d式の区分は、先に筆者の考えているものと大略一致するものである。

この田部井の分析については若干の問題点を指摘しうる。たとえば土器文様帯系統として区分されたA～E類のうち、D類の文様としてあげられている連続入組文についていえば、報告書第43図の18・19の文様は第II期（安行3c式）のものとするよりも、第I期（姥山II式・III式）のものである。その具体例としては田部井も第I期の文様として採用している黒谷田端前遺跡出土例があげられる。黒谷田端前遺跡の土器については後段でさらに論じることにするが、田部井の示した報告書第42図の1・2のようなものと、第43図18・19のようなものは同一の時期の所産と考えられる。従って、18・19

の文様は第Ⅰ期とせざるを得ず、このD類の第Ⅱ期の文様としては、黒谷田端前遺跡の報告書第77図355に示された文様（岩槻市遺跡調査会　一九七六）や筆者等の報告した真福寺泥炭層出土土器のうちの第三図3のような文様、あるいは山内の示した小豆沢遺跡出土土器の広口壺の胴部にみられるような列点を伴う平行沈線による帯状入組文の存在を考える必要がある。そしてそのような文様を経過したうえで田部井の示した第44図20のような第Ⅲ期の文様へと変遷していくのである。

以上のような点とともに遺跡の調査では第Ⅱ期と第Ⅲ期の土器の層位的区分が明確にし得なかった点などいくつかの問題が指摘しうるけれども田部井の明らかにした3c式と3d式の区分は基本的に正しいものと認められる。この点は後谷遺跡からは大洞C_2式土器、網目状撚糸文を胴部に持つとみられる土器などが出土していることも上述の点を傍証するものといえよう。このような事例はやはり奥東京湾地域内に存在する茨城県猿島郡石畑遺跡にもみとめられる（五霞村教育委員会一九七七）。石畑遺跡第一五号住居址からは杉田A類に相当する土器を主体とし、それに若干の前浦式土器とともに、大洞C_2式土器、網目状撚糸文土器などが伴っている。このように前浦式に大洞C_2式のみならず少量の撚糸文土器が伴う例は千葉県多古田遺跡、同久方貝塚（鈴木　一九六五）、同山武姥山貝塚、同荒海貝塚（西村　一九六五）などで確認されている。この点について岩崎卓也は否定的見解を示したことがあるが（松戸市教育委員会　一九七三）、それはこの種の土器の伴出関係を示す事例に多く接していなかったためと思われる。この石畑遺跡において、前浦式、大洞C_2式および撚糸文土器と関係するものが杉田A類のごとき安行3d式であることが明確となった。従って後谷遺跡出土土器のうちの第Ⅲ期に編年されるものの主要な部分、石畑遺跡第一五号住居址の主体となる部分および杉田A類土器の大部分をもって安行3d式の代表的な内容とすることができよう。

これに対して安行3c式は筆者等のいう真福寺泥炭層出土土器の主要な部分を占めるものであって、山内の示した東京都小豆沢遺跡（山内　一九六四）、坂詰の示した埼玉県石神貝塚B地点（坂詰　一九六三）、神奈川県下原遺跡（神奈川県

一九七九）などに類例が多数存在しているが、その内容については若干の整理を必要とする。というのは、真福寺遺跡や下原遺跡にみられるように、この中には姥山Ⅲ式やそれに類似する細密な沈線の施文された土器が存在しており、これらと安行3c式との関係を明確にする必要があるからである。換言すれば、先の筆者等の真福寺泥炭層出土土器の分析において、①および②のグループとしたものと、③のグループとしたものとが、同一の型式に含めて考えられるのか、それとも別個にきりはなして考えるべきか否かに関する問題である。この問題はつまるところ姥山Ⅱ式と姥山Ⅲ式の細分の可否に関する問題に帰結するものといえよう。

筆者が関東地方東部の資料に基いて晩期の第二段階の型式としての姥山Ⅱ式を設定し、それに後続するものとして姥山Ⅲ式を考えたのは以下のような点にあった（鈴木　一九六三）。

1　姥山Ⅱ式とⅢ式は文様における縄文の有無という点を除けば、両者ともほとんど同一の器形・文様からなりたつものであること。

2　姥山Ⅱ式とⅢ式の区分にさいしては、両者が層位的に分離できるような証拠は得られていなかったこと。

3　姥山Ⅲ式に顕著にみられる縄文の欠除という現象は、後続する安行3c式などにみられるように、関東地方晩期縄文土器の流れの中にあっては時間的にみて新らしい要素として理解できること。

1は両者が異った土器のセットを構成するとするのであり、このことと3にみられるような縄文を欠いていく傾向を新らしい要素として考え、2のような点はあるものの、一応両者を別型式とし、新旧の時間的関係としてとらえたのである。このような筆者の考え方については、すでにいくつかの批判的見解が示されている。それらの多くは2の層位的事実が不明確である点と、各遺跡における姥山Ⅱ式・Ⅲ式のあり方からみて、両者は同一の型式における変化として考えられないであろうかという点にあるようである（杉原・戸沢　一九六四）。たしかに筆者が姥山Ⅱ式・Ⅲ式についてとりあげて以来、今日に至るまで多くの晩期遺跡が調査されたが、それらの多くの遺跡において、姥山Ⅱ式とⅢ式が層位的に分離

しうる事例は松戸市貝の花貝塚以外に明確なものが存在しない（松戸市教育委員会　一九七三）。また、姥山Ⅱ式とⅢ式が共に発見されている遺跡において、両者の量的なあり方が不均等である場合（たとえば松戸貝の花貝塚）や、一部の器種が他にくらべて多く出土するというアンバランスな事例（たとえば富士見台遺跡　金子　一九七二b、佐倉市天神前遺跡杉原・戸沢　一九六四、裏慈恩寺遺跡　庄野・立木　一九六七など）も少なからず存在する。

以上のような点からみて、姥山Ⅱ式と姥山Ⅲ式は時間的に相互に分離した別型式とみなすよりも同一の時期に併存した二つの型式と考えられてくる。従って筆者は姥山Ⅱ式とⅢ式はほぼ同一時期に分布中心を異にして併存した二つの型式であると考えるのだが、かかる両者の同時平行を結ぶ鍵の一つとして細密沈線文を有する土器がある。この細密沈線文土器は東部関東地方においては姥山Ⅱ式土器のセットの一部として存在しており、胴のふくらんだ平縁深鉢形土器の胴部に、半月状の沈線区画を引き、その内か外に細密な沈線文が施文されるものが特徴的である（たとえば鈴木一九六四の第1図14・15、同一九六五　第3図8～10）。これに対して奥東京湾周辺地域以西の地域においてはさまざまな細密沈線文の存在が指摘しうる。たとえば、本稿第1図2のような波状縁深鉢形土器の縄文に相当する部分に細密沈線が施されている例がある。本例と全く同一のものは神奈川県下原遺跡に良好な資料が存在する（神奈川県　一九七九）。また、本稿第3図39～41のような変形広口壺形土器にも細密沈線が存在する。これと全く同一の類例は埼玉県小深作遺跡に存在する（大宮市教育委員会　一九七一）。このほか、細密沈細文を有する土器はすでに旧稿で指摘したとうり、千葉県西部から奥東京湾周辺部、西部関東にかけて広がっており（清水・鈴木　一九六六）、現時点においてその分布の中心は奥東京湾周辺地域に求めるのが妥当である。

これらの地域の細密沈線文を観察すると、その多くが縄文の代替として用いられていることがわかる。この点についてはすでに岩崎卓也により指摘されているが（松戸市教育委員会　一九七三）、この細密沈線を縄文におきかえればその多くは姥山Ⅱ式土器と区別しえないものとなる。従って、これは姥山Ⅱ式の変形した姿と考えられるもので、沈線による縄

文の代替ということは、安行3c式で確立する縄文の欠除に至る一つの過程とみなすことができる。以上のような点からみて、筆者は東部関東に姥山Ⅱ式が、奥東京湾及びそれ以西の地域には姥山Ⅲ式＋細密沈線文土器が分布していたものと考えている。もちろん、両者の間にはかなりの程度の交流が存在したことも事実として指摘しうる。

以上に述べたような筆者の見解を具体的に示す実例としては、埼玉県岩槻市黒谷田端前遺跡出土の一括資料を指摘しうる。黒谷田端前遺跡の一部において、ローム面が若干高くテラス状を形成した地点があり、その地点の径約9メートルの円形の範囲から、数ブロックづつのまとまりとなって一群の晩期の土器約二十点が出土した（岩槻市遺跡調査会　一九七六）。ここから出土した土器は、姥山Ⅱ式として考えられるもの三点（報告書土器番号、365、367、395）、姥山Ⅲ式と考えられるもの四点（同373、382、388、389）、姥山Ⅱ式かⅢ式のいずれかに属するとみられるもの六点（369、370、391、392、394、396）、細密沈線文を持つもの一点（393）、などによって構成されており、この他に若干の安行3c式（383、385、397）が存在する。これらのうちの主体をなす姥山Ⅱ式、Ⅲ式には、この種の土器を特徴づける波状縁土器や枠状文を有する深鉢形土器が認められないものの、文様・器形等の特徴からみて誤りないものである。従って若干の時期を異にする資料が存在するという点はあっても、本例をもって奥東京湾地域における姥山Ⅱ式、Ⅲ式、細密沈線文土器の共存関係を示す具体的な事例として考えることができる。この黒谷田端前遺跡一括出土資料によって、安行3c式と姥山Ⅱ式、Ⅲ式との関係が明確なかたちでとらえることができた。なお黒谷田端前遺跡の土器の分析においては、上述した一括出土資料を全体として安行3b式に相当するものとしてとらえている（岩槻市教育委員会　一九七六）。この点については後にさらにふれることにするが基本的に正しい理解といえる。なおこの他に岩槻市裏慈恩寺遺跡出土土器も、内容的には整理する必要があるが、ほぼ同様の内容を持つ事例として考えることができる（庄野靖寿・立木新一郎　一九六七）。

四　結　語

大正末年に大山史前学研究所によってはじめて調査された真福寺泥炭層遺跡の出土土器を紹介しつつ、この資料が戦前から戦後にかけての関東地方晩期縄文土器の編年研究の流れの中でいかなる役割を果してきたかについて学史的な整理を行いながら概観してきた。その主要な点について要約を行えば以下のようになろう。

1　大山史前学研究所による真福寺貝塚および泥炭層遺跡の調査は、山内清男による安行式土器の細分に決定的な影響を与える資料をもたらした。

2　山内はこれに基いて安行式土器をまず三分し、安行1～3式を設定するが、これは漸定的なものであり、やがて安行式の五期区分が行われるに至る。

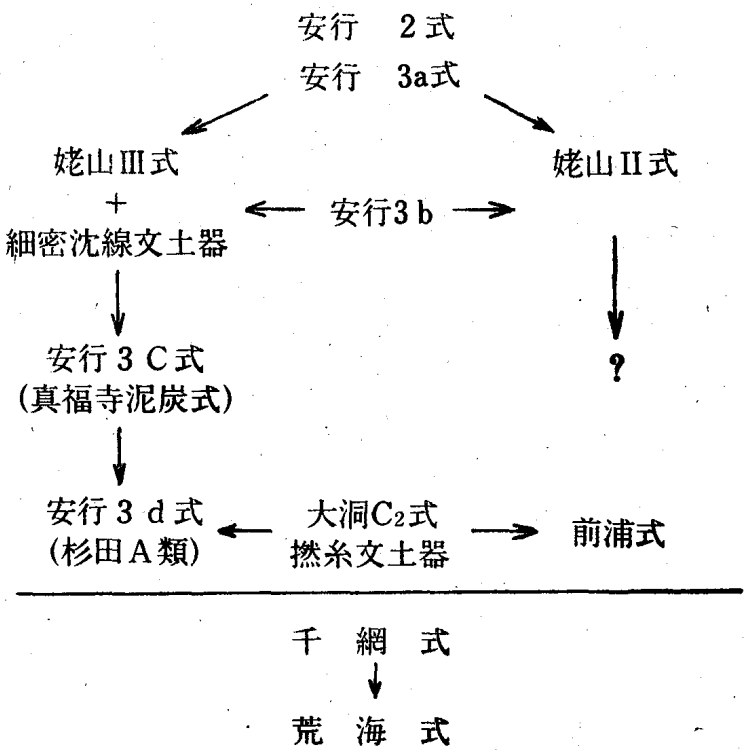
3　この山内の安行式の細分過程において安行3式、後には安行3c式と呼ばれた土器型式の具体的な内容は、当時において最も充実した内容を持つ真福寺泥炭層出土資料であったことは、山内が晩年に公表した小豆沢遺跡出土資料によって明らかとなった。

4　この結果、真福寺貝塚泥炭層出土土器や石神貝塚B地点出土土器をもって、安行3b式類似の土器としたり、安行3c式直前型式とみなすべきではなく、これらこそが安行3c式であり、それらとは異った様相を持つ杉田A類に代表されるような土器が安行3c式よりも新らしい時期の所差として、安行3d式とすべきものであることが明らかになった。

5　安行3c式の主たる分布域は奥東京湾およびそれ以西の南関東地方を中心としているが、これらの地域で安行3c式に先行して存在した土器型式は黒谷田端前遺跡にみられるような姥山Ⅲ式を中心とし、それに細密沈線文土器と若干の姥山Ⅱ式を伴うものであったとみられる。

6　安行3d式もその分布範囲は安行3c式と同一で、奥東京湾地域においては後谷遺跡出土土器中の第Ⅲ期とされるものや石畑遺跡一五号住居址出土土器、それ以西の地域においては杉田A類の大部分の土器などによって代表させることができる。

真福寺泥炭層遺跡出土土器を中心とした問題はおおよそ以上のようなものだが、これらの点から派生した編年上の問題はきわめて多岐にわたっている。たとえば安行3c式、3d式と前浦式土器との編年的関係、同じく大洞系土器との関係などがただちにとりあげられよう。また姥山Ⅱ式、Ⅲ式と安行3b式の関係や早川智明の提唱する犢橋式との関係ないし大洞系土器との平行関係なども無視しえない。これらについていちいち詳述することは本稿の意図するところではないが、これらに対する筆者の全体的な見解を示すものとしての編年試案を以下に明らかにしておきたい。



第1表　関東地方晩期縄文土器編年試案

第1表がそれだが、安行3c式に先行する型式として東部には姥山Ⅱ式を、奥東京湾及びそれ以西の地域には姥山Ⅲ式＋細密沈線文土器を考えている。もちろん、両者の間には相当ていどの交流があったのも事実で、これは東部における姥山Ⅲ式奥東京湾以西における姥山Ⅱ式の若干の存在によって知ることができる。このような東西関東の土器型式の交流は安行3c式、3d式においても認められることである。そして奥東京湾地域を中心としてこの様な交流がかなりあったということ自体のなかに実は山内の安行3b式の内容的混乱を解く鍵があると考えられるの

である。周知のごとく、姥山Ⅱ式とⅢ式は文様構成のうえでは極めて近似しており、その区分は縄文の有無という点を除くと多くの場合に困難となる。従って両者が共存している黒谷田端前遺跡の一括資料のようなものをながめた場合に姥山Ⅱ式とⅢ式が同一の型式を構成している、換言すれば同一型式内の変化であると考えるのは土器型式の認定のしかたの一つとして十分に考えられることである。おそらく山内も、大山史前学研究所によってもたらされた真福寺貝塚及泥炭層出土土器等を検討する過程で同じように考えたのではなかろうか。このような場合に、前浦式と安行3c式のような文様上のコントラストの強い土器どうしであれば、異った型式としてたやすく区別しえたのであろうが、単なる縄文の有無という点や、細密沈線文土器のようなまぎらわしい土器が介在していたことがこのような結果をまねいたのだろう。従って筆者は山内が安行3b式の説明に対して一貫性を欠き、同一の土器を3b式とも3c式ともしたり、3b式に縄文のある土器とない土器を共に含めて考えようとしていたりしたのは、山内が3b式の実体を黒谷田端前遺跡出土一括資料のようなものと考えていたことにあると考えるのである。

その後筆者は東部関東地方において姥山Ⅱ式、Ⅲ式を設定し、山内の安行3b式との対比を行ったが（鈴木　一九六四）、この時には姥山Ⅱ式が安行3b式対比としては最も可能性が高いけれども、安行3b式の中で縄文を持たない土器をどのように処理するかを明確にする必要があると指摘した。この時点での筆者の考えはあくまで姥山Ⅱ式→Ⅲ式という編年観に立っていたから、安行3b式における縄文の有無はあくまで時間的な新旧関係を反映するものと考えていたのである。しかしながら姥山Ⅱ式とⅢ式の各遺跡での出土状況が具体的に明らかになって来るにつれて、姥山Ⅱ式とⅢ式は分布中心を異にする併行型式とみなすべきであると考えられるに至り、特に黒谷田端前遺跡における一括資料などからその内容も具体的になってきた。このような点から考えると、山内の安行3b式は姥山Ⅱ式の奥東京湾周辺地域におけるあり方を示すものといえ、3b式の中に縄文を有するものと無いものとが存在していても不合理ではないことになる。このような点から筆者は奥東京湾周辺部を中心にみとめられる姥山Ⅲ式＋細密沈線文＋若干の姥山Ⅱ式という土器群を全体として安行3b式に相当

するものと考えたい。東部関東においては縄文を有する土器が主体となって構成される姥山Ⅱ式が分布しており、これは東部関東における安行3b併行型式といえよう。

以上のような編年観に立つと姥山Ⅱ式、Ⅲ式の段階から南関東地方の東西の地域差が顕著になってきたことになる。このような傾向はすでにそれに先立つ晩期初頭の段階の粗製土器にみられた現象であったが（鈴木　一九六八、一九六九、金子　一九七二）、それがようやく型式全体の差として現われてきたことを示すものである。そしてこの差異は次の前浦式と安行3c式、3d式において最も顕著なものとなる。この両者の対立はきわめてあざやかであるので、この段階の平行関係だけが注目されやすいのだが、実はそれに先行する晩期初頭から除々に形成されてきたものであることを看過すべきではない。またさらにとりあげるべきこととしては、姥山Ⅱ式とⅢ式、前浦式と安行3c、3d式との間にはいずれも相互の交流がみとめられるという点である。その交流とは単に相互の土器がそれぞれの地域にもたらされ共伴しているという点だけでなく、文様構成、手法の点についても認められる点である。この点については姥山Ⅱ式、Ⅲ式についてはすでにいくつかの点を指摘しているので安行3c・3d式と前浦式の例について明らかにしておこう。前浦式を主体的に出土する遺跡において、前浦式の文様構成をとりながら縄文を全く伴わない土器や本来縄文が施文さるべき部分に安行3c式ないし3d式に特有の米粒状の列点が充鎮されている例がある。前者は千葉県多古田遺跡、同山武姥山貝塚などに少量みとめられ、後者のような例は千葉県西広貝塚（市原市教育委員会　一九七七）、茨城県石畑遺跡（五霞村教育委員会　一九七七）などに好例がある。要するに前者は前浦式土器の要素である縄文を欠除するという形をとり、後者は列点文を加飾するという形で安行3c・3d式の要素をとり入れているといえる。これらは安行3c式、3d式と前浦式との間に、文様要素の交換＝入れかえが可能であったことを意味するものであり、これは両者の関係が単なる時間的平行関係以上のものであったことを暗示している。そのように考えたとき、安行3d式と前浦式がともに浮線網状文に代表される千網式に次の段階でとってかわられ、その伝統をたちきられてしまうという消滅の過程の類似も両者の近似した性格を示すものと解することができる。

第1表の編年表にまつわる問題としては、以上のほかに前浦式自身の細分の問題と、安行3a式についての問題がある。前浦式の細分についてみると併行型式が安行3c式と3d式であるとすれば、当然前浦式もまた二分しうるのではないかという点が考えられる。この点についてはすでに鷹野光行の研究があり、それによると前浦式は従来いわれていた前浦直前型式を中心とした前浦Ⅰ式と、大洞C_2式を伴い、発達した「の」の字文を有する前浦Ⅱ式とに区分しうる（鷹野　一九七八）。筆者も基本的にはこの考え方に従うものだが、姥山Ⅱ式と前浦Ⅰ式との器形・文様等の流れについていま少し検討を加える必要があるように思われるため、現在ではⅠ式とⅡ式の区分を用いなかった。

安行3a式に関しては、従来筆者は安行3a式を安行Ⅱ式の中に含めて論じてきたけれども（鈴木　一九六三、一九六四など）、ある時点から安行3a式の名称を採用し、その理由については明確な説明を行っていない（鈴木　一九七〇など）。この点については関東地方における土器編年において、後期と晩期の境界をどこに、どのような理由によって設けるかという点にも関連する問題であるので、いずれ機会を求めてとりあげるつもりである。本稿においては金子裕之が安行3a式土器の分析を行ったさいに示された筆者の見解の要約の中に、現在の筆者の基本的立場が最も正しく示されていること、またそこに示された安行3a式の具体的内容も筆者の考えている安行3a式の内容とほとんど一致しているものであるという点を指摘しておくに止めたい（金子　一九七九）。

〔付記〕　本文を草するに当って奈良国立文化財研究所　金子裕之氏および東京大学大学院　大塚達朗氏から文献・資料についての御教示を得るとともに、筆者の見解等についていくつかの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝を申し上げる次第である。また、本拓本を保存され、筆者等に研究の契機を与えられた竹下次作氏に深く御礼申し上げるものである。

文　献

麻生　優・川崎義雄　一九六四　東京都上目黒・東山遺跡の晩期縄文土器　古代学研究　三七

市原市教育委員会　一九七七　西広貝塚、

茨城県猿島郡大霞村教育委員会　一九七七　石畑遺跡

岩槻市遺跡調査会　一九七六　黒谷田端前遺跡

後谷遺跡発掘調査会　一九七九　後谷遺跡

大宮市教育委員会　一九六九　奈良瀬戸遺跡

大宮市教育委員会　一九七一　小深作遺跡　大宮市文化財調査報告　第三集

神奈川県　一九七九　神奈川県史　資料編二〇　考古資料

金子裕之　一九七二a　安行系紐線土器における二者　信濃　二四―七

――――　一九七二b　千葉県富士見台遺跡の調査　考古学雑誌　五八―三

――――　一九七五　埼玉県石神貝塚の調査　埼玉考古　一三・一四合併

――――　一九七九　茨城県広畑貝塚出土の後・晩期縄文式土器　考古学雑誌　六五―一

川崎義雄　一九六六　東京都調布市下布田縄文晩期遺跡　武蔵野　四五―二・三合併

甲野　勇　一九二八　埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告　史前学会小報　二

国学院大学考古学会　一九六三　埼玉県大宮市奈良瀬戸遺跡展

再び真福寺泥炭層出土の土器について（下）

若木考古　六八

埼玉県教育委員会　一九七五　高井東遺跡　埼玉県埋蔵文化財調査報告　第五集

坂詰秀一　一九六三　埼玉県石神出土の晩期縄文土器　富士国立公園博物館研究報告　第一〇号

清水潤三・鈴木公雄　一九六六　真福寺遺跡泥炭層出土の土器に就いて　史学　三九―二

庄野靖寿・立木新一郎　一九六七　岩槻市裏慈恩寺遺跡発掘調査報告　埼玉古考　五

杉原荘介・戸沢充則　一九六三　神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究　考古学集刊　二―一

――――・――――　一九六四　千葉県天神前遺跡における晩期縄文式土器　駿台史学　一五

――――・――――　一九六四　千葉県堀之内貝塚B地点の調査　考古学集刊　三ノ一

杉山寿栄男　一九三〇　日本原始工芸概説

鈴木公雄　一九六三　千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて　史学　三六―一

――――　一九六四　姥山Ⅱ式土器に関する二・三の問題　史学　三七―一

――――　一九六五　千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて　史学三八―一

――――　一九六八　関東地方晩期縄文文化の概観　歴史教育　一六―四

――　一九六九　安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数　信濃　二一―四
――　一九七〇　後・晩期縄文土器における Design System について　人類学雑誌　七八―一
鷹野光行　一九七八　前浦式土器の研究　考古学雑誌　六四―三
西村正衛　一九六一　千葉県成田市荒海貝塚　古代　二三
――　一九六五　千葉県成田市荒海貝塚C地点発掘報告　早稲田大学教育学部学術研究　一四
――　一九七四　千葉県成田市荒海貝塚（第一次調査）――東部関東における縄文晩期文化の研究（その一）――　早稲田大学教育学部学術研究　二二
――　一九七五　千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）――東部関東における縄文後・晩期文化の研究（その二）――早稲田大学教育学部学術研究　二四
――　一九七六　千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）――東部関東における縄文後・晩期文化の研究（その二続き）――早稲田大学教育学部学術研究　二五
早川智明　一九六五　所謂安行式土器について――土器型式の再編成に関する予察――台地研究　一六
松戸市教育委員会　一九七三　貝の花貝塚　松戸市文化財調査報告　四
山内清男　一九三〇　所謂亀ケ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末　考古学　一―三
――　一九三二　縄紋土器の終末（日本遠古之文化　所収）
ドルメン　一―六　一―七
――　一九三四　真福寺貝塚の再吟味　ドルメン　三―一二
――　一九三九―一九四一　日本先史土器図譜　解説
――　一九六四　縄紋式土器・総論　日本原始美術　I
――　一九六七　東京都板橋区小豆沢発見の安行3c式土器　山内清男・先史考古学論文集　三
吉田　格・川崎義雄　一九六九　東京都大田区下沼部貝塚出土の晩期縄文式土器　石器時代　九